

2015年11月29日に第18回大会が第3研究館にて開催されました。以下は、その時の個人研究発表の発表者のまとめです。

前回個人研究発表まとめ

「ヘーゲル『大論理学』（第二版）「定在」における無限論」

堀永 哲史（本学社会学研究科修士課程）

本発表では、ヘーゲルの『大論理学』「有論」（第二版）、第一部規定性（質）における無限を論じた。無限という言葉で通例おもし起こされるのは、無限小や無限大のような数学的無限であろう。この種の無限は、一般化して言えば、際限がなく延々と続く無限である。数学的無限は量論で詳論されるので本発表の範囲ではないが、しかし無際限な連続という意味での無限は、本稿でも「無限進行」として議論された。

本発表が「有限なもの」と「無限なもの」のもとで念頭に置いたのは、人間を含む有限なもの一般と「神」ないし「絶対者」である。このことを念頭に次の二つの問いを立てた。第一の問いは「有限なものはどうにして自分の外へ超え出て無限なものへと至るのか」である。第二の問いは「無限なものはどうにして自分の外へ超え出て有限なものへと至るのか」である。第二の問いは、シェリングが「一切の哲学の問題」としながら同時に、解き得ない問いと見なしたものである。しかし有限なものが存在することの論理的な必然性を示すことができなければ、無限なものにとって有限なものは存在しなくてもよかったものとされる余地を残してしまう。そこで本発表の課題は、ヘーゲルの「真無限」が有限なものを必然的な契機として組み入れていることを示すことであった。

ヘーゲルの論述を追う際に本発表で注目したのは、「質」というカテゴリーである。質論の無限論では、それだけで自立して存立するという質的なものの在り方と、この在り方の転換に注目することが、真無限への展開を見極める鍵となる。

本発表は次のように議論を展開した。1) 有限なものは消滅して別の有限なものになる運命にある。この生成消滅は無際限につづく。これが第一の無限の形態である「無際限性」である。2) この生成消滅は質的に異なる有限なものへと変化する事の繰り返しではあるが、しかし同じ有限なもの連続である。例えば、葉は枯れ土と成るが、葉も土も同じ有限なものである。したがって、生成消滅のなかで有限なものは直接的に自分に一致する。有限なものどもが構成するこの自己関係構造が「無限なもの」である。3) しかしこの無限なものは有限なものとは質的に異なるものであり、それゆえ有限なものを自分から排斥するので、有限な無限なものすなわち「悪無限」にすぎない。4) こうして、有限なもの→無限なもの（悪無限）→有限なもの→…というように両者の交替が無際限に続く。これが「無限進行」である。ここでは例えば、人間が彼岸の神を捉えようとするも、そのたびに神を有限化してしまい失敗するという神学的な場面が想起される。5) しかし実際にはこの無限進行のなかで、有限なものと無限なものとは各々の反対のものを媒介して再び自分へと還っている。両者は質的に自立して在るのではなく、他方を媒介して初めて在ることが明らかとなる。そして両者の関係という全体の契機に両者は位置づけられる。こうして、両者を契機とする全体としての「真無限」が把握される。

ところで冒頭の二つの問いは、有限なものと無限なものとは各々自立したものを見なし、そのうえで

他方への移行を考えようとしていた。しかし、そのような二分法では悪無限しか捉えることができない。したがって、これらの問いはその前提からして否定される。これに対してヘーゲルが明らかにしたのは、有限なものを自分の契機とすることで、つねにすでに有限でも無限でもあるような真無限である。こうして本発表は真無限を把握することで、同時に有限なものが必然的に存在する仕組みを明らかにした。